



酒 2 題

寺 本 四 郎

1. きぎ酒の科学

味覚は舌における化学反応が主体である。形態学的に  
 いえば舌の表面に「味蕾」がありその内部に味細胞があり  
 それから味神経を伝つて味の知覚を得る。しかしその  
 味神経の舌上に於ける分布は決して一律ではない。五味  
 の内甘味は舌端部が最も強く酸味、鹹味は舌縁部に分布  
 し苦味は舌のつけ根の方に分布している。又辛味、渋味  
 というものは味神経への刺激以外に更に肝覚痛覚への刺  
 激も加わつたものである。この様は知識は今日高等学校  
 の生理の時間か女子短大家政学科の常識となつている。

酒を啣く場合にもこれ等の味覚の科学を無視すること  
 は出来ない。

日本清酒は五味の調和ということがむつかしい。五味  
 の内の特別に強烈なものがないだけにそれ等の適當さとい  
 うことが必要なわけである。その啣き方としては猪口  
 の殆ど縁位の量を舌の尖端から静かに中央更に奥に拡げ  
 て行きその間甘酸鹹味から苦渋率の強のかな刺激を知覚  
 しなければならない、更に静かな吸気とときに嗅覚への  
 刺激も考えて批判する。また啣き酒のとき温度も重要で  
 ある。各味は温度によつて刺激に対する差異がある。即  
 ち0°Cと常温(15°C)によつて各味の検知度が次のように  
 となつている。

	常 温	0°C
食 塩(鹹)	0.05 %	0.25 %
クエン酸(酸)	0.025%	0.003%
砂 糖(甘)	0.1	0.4
塩酸キニーネ(苦)	0.0001	0.0003

温度による酸味の変化の少ないのに較べ苦味、苦味の  
 温度による変化の大きいことは、冷できく品評会の優等  
 酒が必ずしも潤では良くなく甘くだれた形となるのもこ  
 の知覚の差異に原因する。

ビールの場合原料ホップに由来する苦味が大きい要素  
 である。従つて舌の中央部から奥へかけての感覚が重要  
 である。啣き方も清酒の様な少量でなくコップ半量程を  
 充分口に含み他の味感覚と苦味の感覚と一致せしめなけ  
 ればない。即ち舌面に接してから味感覚の生ずるまでの

時間が次のように味の種類によりことなるからである。

食 塩(鹹)	0.3秒	砂 糖(甘)	0.4秒
塩 酸(酸)	0.5秒	キニーネ(苦)	1.0秒

従つて含み啣き (Volmündigkeit) の形をとらなけれ  
 ばならない。味覚には爽快さを必要と体温に近いものが  
 拙く体温より遠ざかる程爽快度が高くなるものである。  
 冷しビールの場合適温は7~9°Cであり5°C以下のもの  
 は冷感への刺激も強いと同時にビール中の炭酸の発生  
 速度の遅いことも考えなければならない。口中で適当な  
 炭酸ガスで気化による刺激がよるしく胃に入つてからの  
 気化はやはり不愉快以外の何物でもない。

ウイスキーの様なアルコール分40%以上のものに対し  
 てはアルコールの溶剤としての性質を充分考えなければ  
 ならない。清酒の様に舌先からチビチビという形は味  
 感覚への微妙な刺激よりもその破滅的の刺激が強くて正當  
 な判定はむつかしい。少量を一気に口中深く放りこむこ  
 とによつて貯蔵ウイスキーの木樽よりの樹脂による苦味  
 をほのかに感ずると同時に嗅覚への刺激が大きい要素  
 で喉から呼吸による鼻への芳香により批判しなけれ  
 ばならない。

しかし味覚も「生きもの」の科学で数学的に1プラス  
 1 2の様にゆかないことが多い。「しるこ」を造る場合  
 適当な砂糖にごく少量の食塩を入れるとき甘味がひきた  
 つ (Hypogeusie 味の消失) こともあると同時に逆に砂  
 糖、食塩、塩酸、キニーネの四味の適当な組合せで殆ど  
 個々の味の感知しないこと (Hypogeusie味の消失) も  
 あり、これ等は清酒並びに合成酒の製造に於て充分関心  
 を持たれるべき問題である。

また塩素濃度で「うがい」をした後水で口をすくぐ  
 と無味であるべき水が甘く感ずる。

(Parageusie 味の異変) 喉酒を10本もするとともにかへ  
 つた場合前の味とことなることは一般に知られるところ  
 である。従つてコブ茶で「うがい」することも味細胞に於  
 ける化学反応を緩和することに意義があるわけである。

一次会後2次3次とのハンゴ酒ともなれば問題外で全  
 ての刺激に対応する感覚器官はもう用をなさない。翌朝  
 胃腸肝臓からの知覚神経が一番先に根ざめるのではない  
 かと思う。

2. 肝臓機能とアルコール

愛酒家の最大関心事は脳溢血、潰瘍からの癌、と共に  
 肝臓障害の三痛対ではなからうか。

血圧 200 の愛酒家が奥様に脳溢血で先だれたり、あま  
 だ覚が癌で逝く例を多々考ええ安心感を持つのであるが肝  
 臓障害だけは何か酒のためにデリデリ消耗して行くの  
 ではなからうかと心配せられる。愛酒家に安心感を与え  
 (以下35頁に続く)